大　津　京（中）

5．大津北郊の地勢

この発見を契機として、滋賀県教育委員会・大津市教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会では大津北郊の各所において継続的に調査を実施することになり、今日までに何とか一つの大津京像を描けるまでにいたった。

大津京を理解するにはまずその地勢をよく知る必要がある。

(1)　大津北郊の西に、南北に延びる比叡山は大半が花崗岩から成っており、その花崗岩が風化し、雨により砂となって流下するが、これはいわゆる白川砂で、流勢に対してきわめてもろい。このため、急峻な比叡山から流れ出て麓に堆積する土砂の量はきわめて多く、短期間に沖積作用は進むのである。大津北郊の平野部はこの砂が堆積して形成されたものである。

大津宮時代頃の大津北郊における琵琶湖の汀線は、多少の出入りはあるものの、現在より600ｍ～700ｍ前後西側にあったとみられる。当時の平地部分は現在の半分近い面積で、きわめて狭長な地勢であったと想定される。

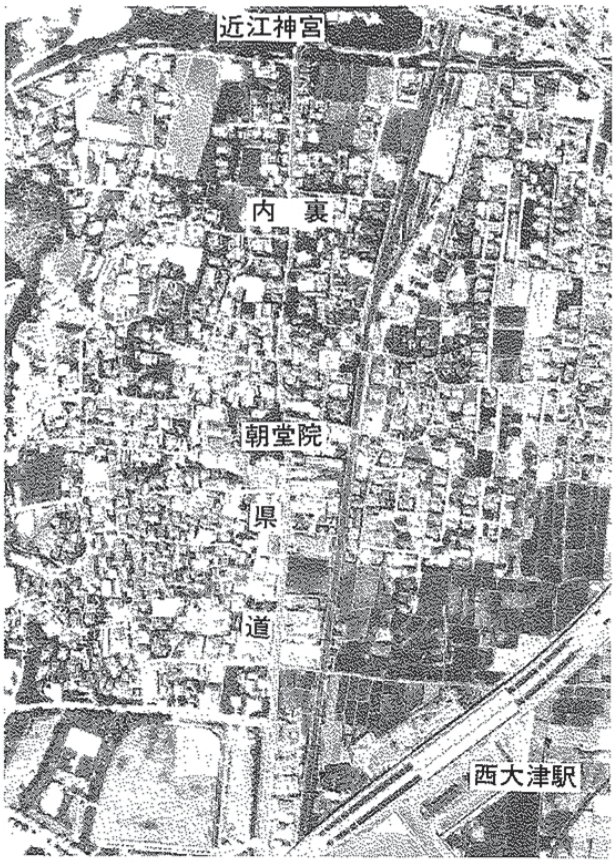
(2)　錦織・南滋賀・滋賀里・穴太の古くから人々の住んだ地域は扇状地で、それぞれ独立した高燥地となっている。そして、その間は谷筋や低湿地で、建物等はこの高燥な扇状地にしか建築できなかったとみられる。

(3)　これらの扇状地はいずれも東西に長い舌状を呈し、しかも、東西の高低差が大きく、宮殿造営には南面して左右対称の建物配置が要求されるが、いずれも適地とはいいがたい。しかし、この中で錦織地域は比較的高低差の少ない平坦地を求めることができる。

(4)　穴太地域では扇状地の大半、特にその南緩傾斜面は大津宮時代の穴太廃寺で占められている。また、滋賀里地域では、小字蟻之内や太鼓塚周辺は住宅が密集しているが、昭和初年頃は藪地で、ここに宮が営まれていたとすれば、その造営時点ですでに削平されているはずの横穴式石室墳が多数確認され、現在でも多くの横穴式石室が民家の下などから検出されている。南滋賀地域でも高燥な西半部には大津宮時代の南滋賀廃寺が占拠している。

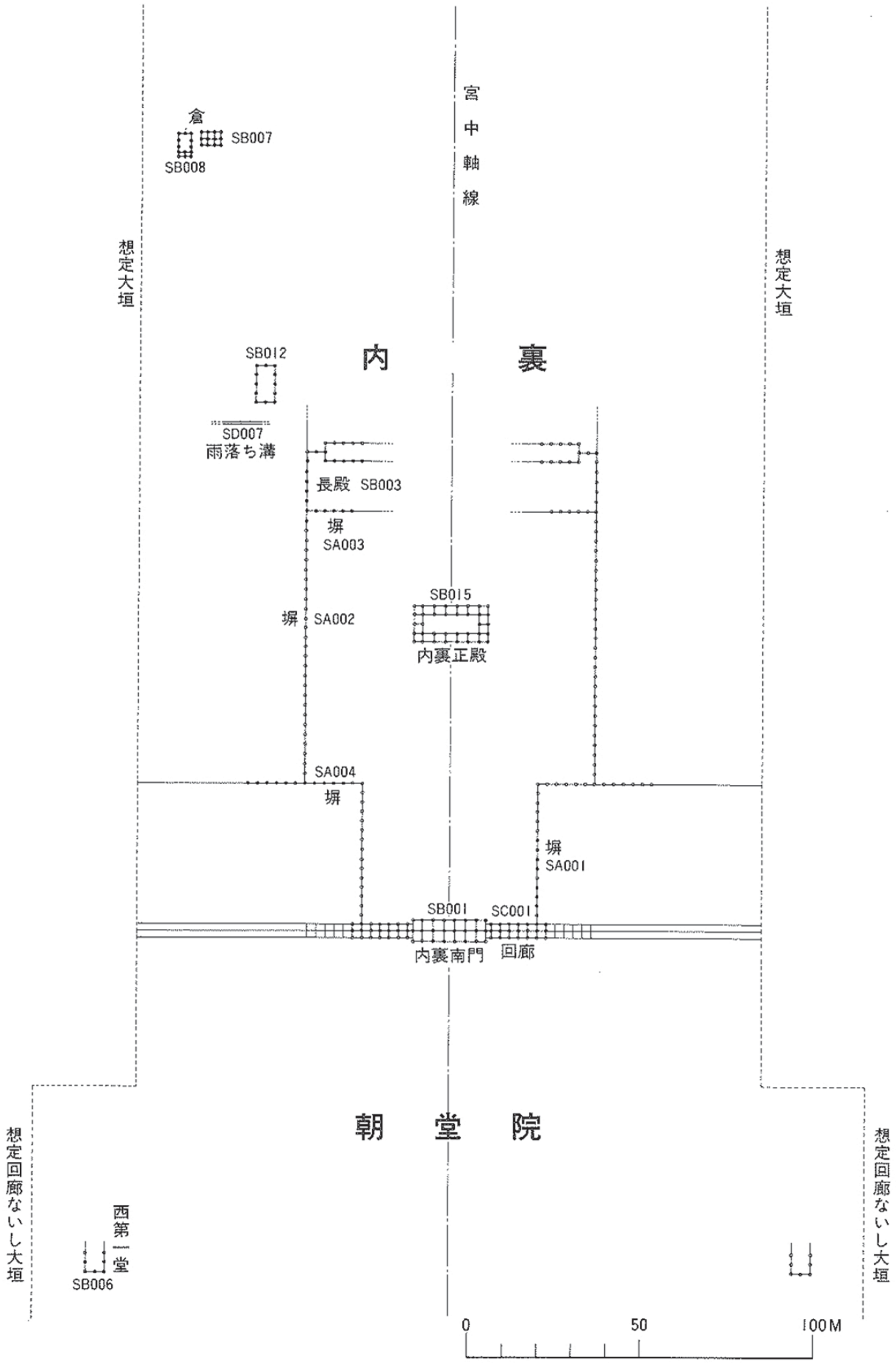
こうした事実はこれらの地での大津宮の存在を否定する資料となる。

(5)　これまでの調査で、大津宮に関する巨大な柱穴をもつ建物跡の検出されたのは錦織地



第１図　大津宮のある錦織地域

1985．3．30
財団法人　滋賀県文化財保護協会



第２図　大津宮中枢部復原図

域に限られ、検出された遺構は方位を同一にする廂付き建物や南北棟の建物、門、回廊、塀、倉、雨落ち溝などで、それらを復原した建物配置が他の宮のそれと共通する要素をもっている。

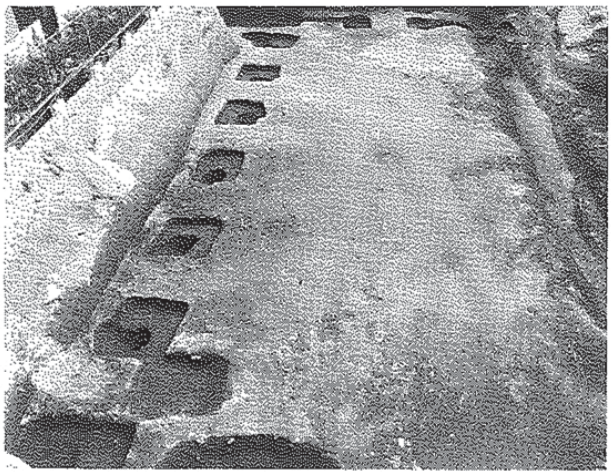
こうした調査結果から、大津京の宮は錦織地域に営まれたと判断されたのである。

そして、細かな錦織地域の地形や発掘によって知られた地下の土質などを勘案して、錦織における建物設置可能範囲は、南北行する県道を中心にして、東西400ｍ前後、南北700ｍ前後かと想定され、この北半部の道路をはさんだ東西 200ｍ前後の一帯がもっとも高燥で平坦に整えられた一角とみることができる。

６．大津宮の復原

これまでに錦織地域で大津宮に関わる遺構の検出されたのは８地点である。これらの遺構と先にみた錦織の微地形とを細かく検討することによって大津宮の中軸線が判明した。そして、それを軸にして検出された遺構を、

第３図　内裏南門SB001と回廊SC001(東から)



第４図　回廊SC001と塀SA001(北から)

東・西に折り返すことによって宮の中枢部を描き出すことができる。

最初に発見された建物跡は内裏南門((ＳＢ001)であることがわかり、復原すると東西７間(21.20ｍ)、南北２間(6.30ｍ) で、その東西に掘立柱による複廊が取り付く。この門より北側が内裏、南側が朝堂院である。門ＳＢ001の北側は塀ＳＡ001・ＳＡ002・ＳＡ003・ＳＡ004 などによって仕切られた２つの空間がある。南側の空間は幅 50.78ｍを測る狭いもので、北側の空間はそれよりひとまわり広いものである。そして、そのほぼ中心に廂付き建物(ＳＢ015) である内裏正殿がある。この建物は東南隅の一部だけの検出であるが、復原すれば東西7間(21.30ｍ)、南北4間(10.40ｍ) の建物になる。が、今後の調査結果によってはもう少し大規模になる可能性もある。柿本人麻呂が大津京廃都後「大宮は　ここと聞けども　大殿は　ここと言へども　若草の　茂く生ひたる……」と歌った大殿はこの建物かと思われる。

なお、塀ＳＡ004 はさらに東に延びてこの２つの空間を仕切る可能性も考えられる。また、ＳＡ003 についても完全に空間を仕切るか、何らかの建物に取り付くかについては不明である。その北側にはおそらく南北２間の長殿とみられる細長い建物ＳＢ003 が東西に延びることが想定されるが、これも中央付近がどうなっているかは今後の調査を待たなけ

第５図　内裏正殿(南から)

第６図　塀SA002(北から)

第７図　塀SA004(西から)

れば明らかにし得ない。また、南北の塀ＳＡ002も長殿ＳＢ003に取り付く形で終るのか、さらに北に延びるかについても不明である。

この塀(ＳＡ002）の外側に当る西北方には４間（10.70ｍ)×２間（5.50ｍ）の南北棟の建物ＳＢ012 や雨落ち溝かとみられる石敷き溝ＳＤ007 があり、さらにその北方には倉とみられるＳＢ007やＳＢ008が配されている。

また、東西に延びる塀ＳＡ004 は南北の塀ＳＡ002 と接したのち、さらに西方に延びている。その西方には大津京造営時に人為的に削られたとみられる高さ２～３ｍの段が南北に延びており、その下縁に沿って南北に大垣などの施設が想定されるが、この東西の塀ＳＡ004 はそこまで延びることが予想される。さらに、門ＳＢ001 から東西に延びる回廊ＳＣ001 も西方はこの想定南北大垣に取り付く可能性も考えられる。

こうしてみると、内裏には二重の塀ないし垣が巡らされていると想定され、内郭・外郭を形づくり、それらの中心部に内裏正殿（ＳＢ015)が存在することになる。そして、地形的にみて、この外郭の外側も建物設置はまだ可能で、関連する建物はさらに西方・東方に広がっていたと推測される。

この内裏の南に復原される朝堂院についてはまだ詳しいことは判明していない。これまでの調査によって得た地下の土質や微地形などによって中軸線より東・西約 120ｍの位置に、南北に延びる大垣ないし回廊が想定され、東西約 240ｍの空間が浮かびあがる。そして、その西北隅に南北棟の建物(ＳＢ006）が検出されている。この建物は２間以上（5.48ｍ以上）×２間（5.56ｍ）の規模をもつもので、建物の南端部のみ確認されている。朝堂院西第１堂に相当する建物と判断される。朝堂院の他の建物や南限については明確ではない。国鉄湖西線西大津駅裏で、かつて大津宮で使われたとみられる木簡が、北から南に流れる溝から出土したが、この溝は朝堂院の東外側に想定される溝に通じる可能性がある。

このように、大津宮は北に内裏、南に朝堂院をそなえた宮であったが、現時点ではこれ以上の内容については明らかでない。文献から推定される「内裏仏殿」や「内裏西殿」、朝堂院の南門である「宮門」、水時計「漏剋」、湖畔の「濱台」などについてもまだ未確認である。

ここに復原した大津宮の構造は、大化改新後遷都された孝徳朝の長柄豊碕宮に比定されている前期難波宮のそれに近い構造をとっており、前期難波宮をやや変形、縮少した形で造営されたものと解される。これは、白村江の戦(663年）で唐・新羅の連合軍に日本・百済の水軍が大敗した後、近江遷都時(667年）の緊張した国際関係や大津北郊の地形などに制約されたためと理解される。(つづく)

（林　博通氏提供）